

大分県姫島村西浦地区における集落構成 — 集落構成・生活空間特性と季節風・生業の関係 その1 —

準会員○濱田菜波*1 正会員 姫野由香*2 同 牛苗*3
同 安藤万葉*4 同 林孝茂*4 同 西悠太*4

7.都市計画—6.景観と都市デザイン
集落構成 生活空間特性

1 はじめに

1-1. 研究の背景と目的

現在、各地域には様々な地域特有の形態を持つ集落・生活空間が存在し、独自の景観を構成している。これらの特性は風土や人々の生活・生業、文化などの条件が要因と考えられており、特に離島地域は海に囲まれた地理的特性により、他地域の影響を受けにくい。そのため、風土や人々の生活・生業、文化などの地域特性がある。

一方大分県姫島村は、昔ながらの漁業集落や、離島特有の風土、生活・生業により独自の景観を有している。近年、この漁業集落における景観を「重要文化的景観」として一体的に保護しようという取り組みが始まっている。また、姫島を対象とした既往研究^{1) 2)}では、姫島住民の行動軌跡、古写真、姫島の生活と生業を整理した産業変遷年表の分析によって文化的景観を構成し得る景観構成要素を抽出している。これらの景観構成要素は、姫島の人々の生活・生業、風土によって相互に関係付けられて存在し、当該地域の景観が成り立っている。ゆえに、文化的景観を継承するには、景観を構成する要素を保全するだけでなく、それらと集落構成や風土、人々の生活・生業の関係を理解し、その保全に努める必要がある。

そこで本研究では、まず当該地域の集落と、風土や、人々の生活・生業との関係を明らかにする。その結果、各地区の集落構成・生活空間特性を把握することを目的とする。

1-2. 研究の方法

本研究では、姫島にある複数の集落から、季節風と集落構成の関係が顕著に表れている西浦地区、大海地区を対象とし、その1では、特に漁師が多く住む、西浦地区^{注1)}について考察する。

はじめに、姫島の各集落の位置と季節風の影響を明

らかにする。次に、西浦地区の集落構成の特徴を把握するために、資料文献調査を行った。また、西浦地区の住民が西浦地区内で営む生活や生業に関する要素を知るために、住民へのヒアリング調査も行った。その後、家屋や、生業に関する施設の分布を示した集落構成図と、地区に特徴的な家屋の平面図を作成する。これらの図面から、西浦地区の集落構成・生活空間特性と季節風の影響を分析し、当該地区の集落構成・生活空間特性と生業との関係を明らかにする。

2 対象敷地

大分県姫島村は、大分県北東部に位置する離島である。昔ながらの漁業集落で、多くの住民は半農半漁で生計を立てていた。しかし現在は、漁師の数も減少し、農業を行う家庭も少なくなっている³⁾。

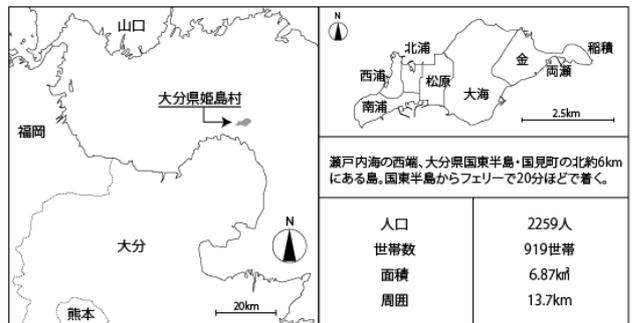


図1 姫島の位置とその概要 (2017年現在)

3 姫島村の集落構成と季節風・生業との関係

姫島の各集落には、離島特有の気候である海からの強風が、冬季の季節風や夏季の台風によって吹き付ける^{4) 5)}。特に冬季の北西から吹き付ける風は、「アナジ」と呼ばれ、毎年2月の四十五夜には、西から暴風が吹く。西浦地区は他の地区に比べて冬季の「アナジ」が直接吹き付けることがわかる(図2)。そのため、西浦地区の海岸沿いには防風林が植えられている。北浦地区は、観音崎のふもとに集落を形成して、「アナジ」が直接吹き付けるのを防いでいることがわかる。南浦・松原地区は春に「コチ」と呼ばれる季節風が直接吹き

The formation of Nishiura settlement in Himeshima village of Oita Prefecture

-The relationship between the formation of settlement or living space and seasonal wind or occupations-

HAMADA Nanami, HIMENO Yuka, NIU Miao, ANDO Mayo, HAYASHI Takashige, NISHI Yuta

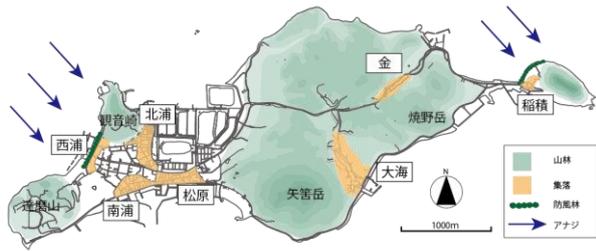


図2 姫島村の集落と季節風の関係

付けることがあるが、「アナジ」が直接吹き付けることはない。大海地区は、四方を矢筈岳や、焼野岳に囲まれた谷間にある集落である。このように山に囲まれた地形のため、冬季の「アナジ」が吹き付けることはない。稲積地区は他の地区から離れた場所にあり、「アナジ」が吹き付ける。このため、稲積地区の北側の海岸沿いには、防風林・果樹園^{注2)}が設けられている。それに対して南側は海に開けている。金地区は、姫島の集落の中で唯一、海岸部から離れた山間部に集落が展開している。そのため、姫島の中では風が穏やかな地区であり、道路沿いに集落を形成している。

4 集落構成と季節風・生業の関係

本章では西浦地区の集落構成の特徴を、季節風や生活・生業との関係から分析する。

4-1 集落構成と季節風の関係

西浦には冬季に「アナジ」が吹き付ける。これに対し西浦では強風対策が集落構成の随所にみられる。海岸沿いには防風林としてマツが植えられており(図3①)、9割以上の家屋が、妻側を海に向けている。また、家屋相互の間隔を狭めて密集させることで、強風を遮断しその影響を軽減している(図3②)。

集落内の道路の中でも、海岸線に平行な道は比較的広いが、海岸線に垂直な道路は、狭小である。これは、海岸線に垂直な道路を狭くすることで、地区内に強風が吹くことを防ぐ効果がある。この垂直な道路は、「セド」と呼ばれ、各家屋の間を通り抜けるようにできている。これは、漁師が家から最短距離で漁港に行くために設けられた道路で、姫島の各集落にもみられる。

海岸沿いに建つ家屋は、防風壁に囲まれている(図3③)。防風壁は3種類があり、ネリベイと山を崩したものは100年以上前に作られたもので、木戸でできたものは1950年頃から現存している。しかし現在では、コンクリートブロックなどで作られた防風壁も一部点在している。

4-2 集落構成と生業の関係

【漁業】西浦地区ではかつて、地区内のすべての人が半農半漁の生活を送っており、特に漁業に重点が置かれていた。そのため地区内には、「恵比須社」、「見張り小屋」、「漁具庫」といった漁業関連施設が多数存在する。漁業の神を祭る「恵比須社」(図3④)は、海岸沿いに立地している。1950年頃まで、漁師たちは、漁に出る前に参拝していたが、現在その習慣は薄れている。しかし、祭事の際には漁師が集まって清掃を行い、毎年1月2日の「乗り初め^{注3)}」では、漁師が御神酒を持って参拝するなど、現在まで継続している習慣がある。「見張り小屋」(図3⑤)は漁師の溜まり場として利用されており、悪天候の日には漁に出る前に天候を確認しあう。この「見張り小屋」は1972年ごろの波止場の埋め立て工事^{注4)}の際に現在の場所へ移動している。「漁具庫」(図3⑥)は海岸沿いや各家屋の敷地内にある。海岸沿いの「漁具庫」は、主に漁師たちが共同で利用している。個人の「漁具庫」(図3⑦)は家屋の敷地内に納屋として存在している。共同の漁具庫では、漁具を収納するだけでなく、作業場も設けられている。このように漁業関連施設は、共同で使う施設は漁港付近に建ち、環境が変化しても海沿いに建てられることがわかる。

【農業】漁業に比べて農業は、自給を補助する目的で営まれていたため、地区内に農業関連施設などは確認できない。しかし、各家屋は敷地内に、農業で用いる道具を収納する納屋を備えている。また1970年代までは地区内に畑はなく(図3⑧)、達磨山や、矢筈岳、また集落の東側の塩田跡地に芋や麦の畑が広がっていた。

4-3 集落構成と生活の関係

西浦では、姫島に昔から継承されている「船曳祭り^{注5)}」、「盆踊り^{注6)}」といった祭事がある。これらの祭事で披露する歌や囃子、踊りの練習や準備は、すべて公民館(図3⑨)と、その前にある「盆坪^{注7)}」(図3⑩)と呼ばれる広場で行われる。さらに、公民館はかつて、「若者宿^{注8)}」と呼ばれる若者達の集いの場であった。また、葬儀の際の精進落しを地区の人が集まって作ることもあった。現在は公民館としての機能も持つようになり、若者だけでなく、地区の人々が集まる中心的存在になっている。公民館も「見張り小屋」と同様に1972年ごろの波止場の工事と、施設の老朽化をきつ

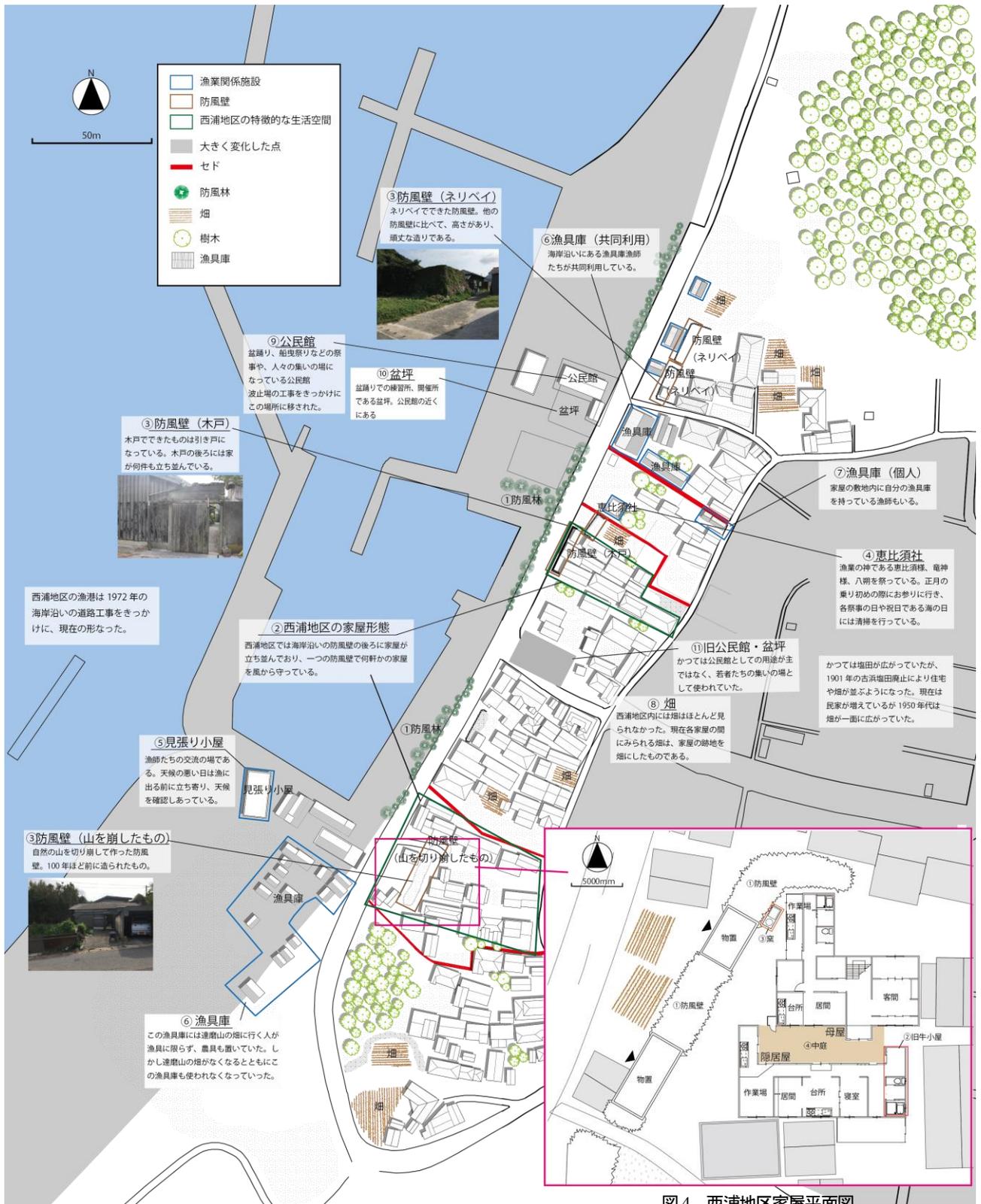


図3 西浦地区集落構成図

けに、現在の場所へ移動している（図3⑨、⑪）。
 このように、漁業関連施設でも、「恵比須社」や「漁具庫」、「見張り小屋」などの、共同利用する施設は変わらず海岸沿いに立地している。また、公民館や「盆

坪」といった生活に関わっており、公共性のある要素も変わらず海岸沿いにあることから、地区の住民にとって海岸沿いは公共性の高い重要な場であることがわかる。

5 生活空間特性と季節風・生業の関係

西浦地区の家屋について、その形態と配置を分析することで、季節風や屋外空間との関係、生業との関係を明らかにする。

図4に示す家屋は海岸沿いに位置し、西側に防風壁が設けられている(図4①)。この防風壁は、山を切り崩して、出入りを二か所掘って作られている。この防風壁が作られたのは1900年頃である。家屋は妻側を海に向けて建てられており、北側が母屋、南側が隠居屋である。かつて姫島で畜産が盛んにおこなわれていた^{注7)}時期は、各家屋に牛小屋があった。現在この家屋では、牛小屋を壊し、隠居屋を増築している(図4②)。防風壁と家屋の間には窯がある(図4③)。これはひじき^{注8)}を茹でるのに使用したり、客が来た際に大量の食事を作る際に利用され、姫島の家屋によく設けられている。母屋と隠居屋で囲まれた中庭では、漁業に必要な網の修理や、餌付け、農業では芋や麦を干したり、牛の糞から、堆肥を作ったりしていた(図4④)。これは半農半漁の生活を送るにあたって、農作業をする広いスペースが必要であったためである。

図面を作成した家屋の内陸側に、何軒もの家屋が隣接している。(図3②)これは、西浦の家屋は一つの防風壁で、何軒かの家屋への、風の影響を軽減しているからだと考えられる。これらの家屋は屏で四方を囲まれておらず、家の敷地内を通り抜けることができるようになっている⁹⁾。なかには、自分の家屋に入るために隣人の敷地内を横切らなければならないようになっているカ所もある。このような配置の家屋群は西浦地区の全体に見られるが、特にはっきり残っている所は、2カ所確認できる。(図3②)。このような配置の家屋が多い要因として、西浦に強風が吹くため、家屋を密集させたこと、東側に塩田が広がっていたため、狭い土地を有効に使う必要があったことなどが考えられる。



*1 大分大学工学部福祉環境工学科

*2 大分大学工学部福祉環境工学科

*3 大分大学大学院工学研究科博士後期課程

*4 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

学部生

助教 博士(工学)

大学院生

大学院生

6 総括

本研究では、西浦地区における集落構成・生活空間特性と、季節風や生業・生活との関係を明らかにした。

集落構成と季節風の関係では、防風林や家屋の建ち並び方、狭い道路、といった防風対策が集落の随所に確認できる。また、集落構成と季節風・生業の関係としては、共同利用する漁業関連施設や公民館、「盆坪」などは周囲の環境が変化しても変わらず海岸沿いに立地している。このことから地区の住民にとって海岸沿いは、公共性の高い重要な場であることがわかった。

生活空間特性と季節風の関係では、海岸沿いの家屋は防風壁を設けていた。海岸沿いの家屋の後ろに、密集して他の家屋も建設されており、一つの防風壁で複数の家屋への風の影響を軽減していることがわかった。また生活空間特性と生活・生業の関係では、中庭に漁業や農業に関する作業スペースを設けており、中庭が生業において重要な場であることが分かった。

【補注】

- 注1) 姫島村は1区から6区までに分かれており、1区が西浦地区であるが、今回の研究では1区の中でも1901年の古浜塩田廃止以前から集落が形成されている海岸沿いを西浦地区としている。
- 注2) 国土基本図より1970年代までは稲積地区には果樹園が存在していた
- 注3) 姫島の漁師たちが毎年1月2日にその年の豊漁と安全を祈願して、御神酒や食事を持って船で沖へ向かう。その後、恵比須社へ参拝し、公民館や船頭の家で宴会を開く
- 注4) 1957年に離島振興対策実施地域委に指定されて以降、姫島では1970～90年代にかけてインフラ整備が活発に行われ、その際に各地区の波止場も整備されている。
- 注5) 1905年ごろから毎年9月に行われる、大帯八幡社にある船を曳いて、歩く祭り。各区が毎年持ち回りで担当する。
- 注6) 毎年盆の時期に姫島全土の盆坪で行われる。「アヤ踊り」、「キツネ踊り」、「銭太鼓」、「猿丸太夫」の5つの踊りがあり、国指定無形文化財に選定されている。養老年間ごろに始まったという説もあるが確証はない
- 注7) 1975年ごろまで、姫島村では畜産が盛んであり、各家庭に1頭牛を飼っていた。しかし、衛生面などの問題が起こったことから、衰退し、現在牛を飼っている人はいない。
- 注8) 12月ごろから姫島ではひじきが採取される。姫島のひじきは価格も高いため、各家庭でひじきを採り、生計の足しにしている。

【参考文献】

- 1) 林孝茂、姫野由香、牛苗、大堂麻理香、安藤万葉、西悠太「大分県姫島村における生活・生業における重要な景観構成要素の特定」大分大学工学部福祉環境工学科建築コース卒業論文、2017
- 2) 野本昂、姫野由香、牛苗、大堂麻理香「生活・生業に関連した歴史年表に基づく景観変容期間の抽出：大分県姫島村の重要な文化的景観選定に関する研究」大分大学大学院工学研究科建設工学専攻博士前期課程修士論文、2016
- 3) 離島統計年報(1990年版(1990年)、1995年版(1996年)日本離島センター)
- 4) 姫島村教育委員会「姫島村史」、1986
- 5) 田中嬉雄「姫島と漁業」、1961
- 6) 坂田泉、月舘敏栄「豊後姫島の漁業集落について」pp.137-140日本建築学会東北支部研究発表会、1977

Undergraduate Student,Oita Univ.

Research Associate,Dept. of Architecture, Faculty of Eng,Oita Univ., Dr.Eng

Doctoral Course ,Oita Univ.

Graduate Student,Oita Univ.